

「九月、東京の路上で」

お話：加藤 直樹さん（ノンフィクション作家）

### 三国人発言と関東大震災

関東大震災時の朝鮮人虐殺についての関心というのが、僕の中で出てきたのが2000年4月です。なぜかという、当時石原慎太郎都知事の三国人発言のニュースを聞きまして、頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けました。

これはとんでもないことを言っているなと思ったんです。関東大震災の朝鮮人虐殺について当時はほとんど知らなかったんです。混乱のなかで朝鮮人が殺されたという程度の記述でそれ以上の知識はありませんでした。

なので石原さんの三国人発言を聞いたときに、関東大震災との関係でとてもまずいことを言っている気がすると思ったんだけど、どうまずいのか自分でもわからなかったんです。

むしろそこからいろいろ調べはじめたというのがありました。

石原慎太郎は2000年4月9日に、陸上自衛隊の第一師団の行事でこういったんです。

「今日の東京を見ますと、不法侵入した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している。もはや東京の犯罪の形は過去と違ってきた。こういう状況ですごく大きな災害が起きたときには、大きな大きな騒擾事件すら想定される。そういうときにみなさん、自衛隊に出動願って、災害の救助だけではなしに、やはり治安の維持も一つ、みなさんの大きな目的として遂行していただきたい」

「三国人」というのは、旧植民地の人々、台湾人や朝鮮人をさす差別的表現ですけれども、当時はこの表現についての議論に終始した感がありまして、そもそも地震が起きたときに外国人が暴動を起こすという話はどうなんだということがほとんど議論されなかったんです。

僕は過去30年の外国の大地震について新聞のバックナンバーを全部調べました。

地震に伴って大きな暴動が起きたことがあるか、その暴動は外国人やマイノリティによって行われたという事実があるか。さらにそれを鎮圧するのに軍隊が必要なことになったことがあるか調べたんです。台湾、イタリア、アメリカ、トルコ。30年という幅で見ると、大きな地震というのはいろいろな所で起きているわけです。ところが暴動、外国人、軍隊のうち、一つも見つからなかったわけです。

外国人はおろか、軍隊によって鎮圧しなきゃいけないほどの事件、暴動自体が起きていないんです。そもそも石原が言っていることがおかしいんじゃないかってことに気づきまして、それから災害に関する社会学の本というのを読んでいきました。

特に恐ろしいのが災害時のマイノリティを敵視する流言です。東日本大震災のときにもありました。東北でボランティアに行っていた若者が被災地での会議で、「外国人窃盗団が近所を徘徊しているという情報があるから夜の独り歩きは気をつけようというのを確認しあった」というんです。話をしてくれた子は当時はそれが当然本当だと思っていたというんです。あるいは阪神大震災のときも、外国人が放火しているとか、中国人が畳を盗んで回っていると

か。

これは外国でも同じです。フランスで中世にペストが流行ったときに、ユダヤ人が井戸に毒を入れたせいであるという流言が広がってその結果、ユダヤ人が虐殺されたという例があります。災害時に暴動の心配、ましてやマイノリティの心配をするというのは逆にナンセンスであって、逆にマイノリティに対する攻撃が治安の名のもとに行われてしまうということ。

それを恐れるんだということが社会学からみえてきまして、それでようやく自分の足元の東京で起きた関東大震災時の朝鮮人虐殺がどうだったんだらうということを僕は調べはじめたんです。

### 朝鮮人虐殺の問題の本質

関東大震災が起きたのが1923年9月1日、11時58分。お昼前だったということと、ほぼ台風に匹敵するぐらいの強風が吹いていたということがあって、すさまじい火災が起きていきました。東京都心と横浜市内はほぼ全焼という状況になって、ほとんどが火災によって10万5千人が亡くなるという状況がありました。

警視庁消防署が持っている消防車も延焼や倒壊によって道がふさがれるなか全く動けない。どんどん延焼していく。

誰もがこれは放火じゃないかと考えるわけです。次には放火するとしたら誰なんだ。

9月1日の午後3時に最初の放火の流言が始まります。社会主義者がやったんじゃないかとか、大本教信者がやったんじゃないかとか、いろんな流言が流れるんだけど、もっとも人々の心をとらえたのは「朝鮮人がやったんだ」という流言だったんです。

そして、またこれがどんどんバージョンが広がっていくんです。「井戸が変色している。これは朝鮮人が毒を入れたからだろう」あるいは破裂音がするわけです。近代都市ですからいろんな施設があるわけで当然爆発するわけです。それを聞いて爆弾が爆発している。誰が爆弾を投げたのか。朝鮮人であると。9月2日に朝鮮人が東京各地で一斉に蜂起する準備を進めていたけど、1日に地震が起きたので、これはいい機会だということで、蜂起を一日早めたんだとか、そういうストーリーがどんどん膨らんでいくんです。そういう形で流言がひろがっていきます。

9月1日の夜には朝鮮人に対する迫害と虐殺が始まっていくんです。

もう一つこのときに重要なのは、メディアと警察が完全に解体しているということです。当時東京には新聞社が十数社あったんですけども、3社を除いて全部壊滅してしまう。この3社も号外を数日後に刷るのが精いっぱい、もちろん取材も何もできません。警察も各警察署は生きてますけど、その間の本庁との連絡とかを自転車でやりとりしている状況でした。

朝鮮人の流言が広がるなかで、自警団が次々と結成されて、東京市だけでも1000を超える自警団が結成されたと言われています。当時は今と違って銃や刀剣の所持が合法でした。ですので3軒に1軒は刀剣を持っていたといわれています。ですので、あっという間にこの自警団が武装する。検問を引いて「おい、お前、15円50銭と言ってみろ」といって、朝鮮人を捕まえるわけです。朝鮮語だと濁音が頭にこないで15円50銭といわずらいんです。それで識別して、おとなしい自警団であれば警察に突き出しますし、そうでなければ殺して

しまうわけです。そして次々と朝鮮人が殺されていくという事態になったわけです。

要するに警察が流言を非常に拡散しました。どうしてそういうことになったのかというと、そのことを自分で告白しているのが正力松太郎です。

正力松太郎という人は読売巨人軍を作ったり、読売新聞を大新聞にしたり、原子力発電所を日本に導入したり、非常に現代史のなかで大きな役割を果たした人ですけども、当時正力は警視庁のナンバー2の官房主事でした。官房主事の仕事は何かというと、特高の元締めです。

9月1日に地震がおきて、警視庁も炎上してしまい、中学校に仮の警視庁を置くんですけども、とにかくそれぞれの警察署から朝鮮人についての報告があがってきます。

最初は正力も「そんなバカことがあるか」と。この地震の大混乱のなかでそんな組織的な暴動がやれるはずがないじゃないかと思うんです。彼は一度、富坂署に実際にとらえたという朝鮮人の取り調べにあたってみると、箸にも棒にもかからない犯罪の事実がないということがわかってくるんです。その朝鮮人が何もしていないのに捕まえられたことを正力もわかってきます。

やっぱりデマじゃないかと警視庁に戻ってくると、警視庁が物々しいことになっている。朝鮮人が攻めてくるという流言によって、ものすごい警備になっていて、正力自身がやっぱりこれはデマじゃない、本当なんだとまた思い直して、ついに9月2日の夕方に各警察署に「不逞の者が爆弾を投げたり放火をしている。嚴重に取り締まれ。全力をそれにそそげ」と通達を出しました。これによって各地の警察署で流言に飲み込まれつつあった警官たちが「ああ、やっぱりこれは流言じゃないんだ」と完全に確信をもつわけです。その結果、上からの指示ですとあって、メガホンで「朝鮮人が暴れています。捕まえてください」とか「殺しても差し支えないんだ」といったことを警官が言ってまわる。

制服の警官が言ってまわることを、普通の人はそんなことはありえないだろうというふう考えるのは難しいわけです。こうして増々、行政が流言にお墨付きを与えることで、流言はますます火に油を注いで拡散してしまうんです。

## 熊谷事件

埼玉県ではこういった内務省の通達を受けて、とにかく県内に入ってくる朝鮮人は皆捕まえろという指示を出すんです。当時、東京から北に逃げる、避難するときの入り口が川口というところなんですけども、川口にのぼってきた避難民のなかから朝鮮人をみつけては、行政がどんどん逮捕していくわけです。それを縄で縛って移送を始めます。いまだにこれはどこに移送しようとしたのかさっぱりわからないんですけども、どうも群馬の駐屯地に運んでいこうとしたんじゃないかと言われてはいますが、とにかく徒歩で100人といった単位の朝鮮人が埼玉県の命令によって歩かされていくんです。同時に、当時埼玉県は自警団の結成を県として、町に呼びかけました。町ではその指示を受けて、一部には「そんなバカなことはありえないから、こんな通達を出してる県はあとで責任を問われるぞ」と拒否したまともな町なんかもありますが、多くの町は指示通り自警団を結成します。

埼玉県は各町の自警団に、捕虜のように数珠つなぎにした朝鮮人の移送をまかせました。

そうすると移送するそばから自警団が朝鮮人を殺す事件が相次ぐんです。1人とか2人とか、逃げた人を追いかけて竹やりで刺すとか、そういった事件が起きました。その最大の規模だったのが、熊谷市（当時は熊谷町）でした。

この熊谷町で町当局が、各家から1人ずつ男を自警団に出せと指示したもんですから、大通りを埋め尽くすぐらいに武装した人々がいるという状況の町でした。

そこにおそらく80人とか100人にはいかないぐらいの朝鮮人が移送されてきたんです。このときにいきり立った自警団の男たちは町の入口で、誰かが「来たぞー」と言った瞬間に朝鮮人に殺到して次々に殺していったんです。熊谷駅の南の踏切あたりなんですけども、そこから町の目抜き通りを引きずりながらどんどん殺していくんです。目抜き通りの最後のところに熊谷寺ゆうこくじというお寺があるんですけど、ここは平家物語に出てくる熊谷直実が庵をむすんでいた跡地に建てられたお寺で、残りの朝鮮人たちを次々と殺していったということがあったんです。

このとき熊谷市で殺された人数というのが最低で40人、多くて80人という数が殺されたといわれています。被災地でもなんでもなくて朝鮮人たちが殺された訳です。その過程に行政当局がいたということが背景にあるわけです。

#### 虐殺の真相をうやむやにした政府

政府なり行政当局が完全に流言を否定するのが9月5日です。山本首相の名前で内閣告諭が出まして、朝鮮人を迫害するなというのを出します。6日には戒厳司令部が朝鮮人を迫害するものに対しては厳罰で臨むというビラを発行しまして、9月7日に治安維持令というものが出されまして、流言をひろめたものは処罰するという勅令が出るんです。これによって虐殺は静まっていくわけですけど、この事態で一体どのぐらいの人が殺されたかというのがいまだにわからないんです。

とにかくうやむやにしてなかったことにしていこうと政府はしていた。

被害者としてきちっと数えられている朝鮮人の数というのは233人に留まるんです。これは当時から233人が被害者の総数のはずがないということは言われていましたが、一体どのぐらい殺されたかについてはいろんな説があります。

朝鮮総督府がいくらなんでも司法省、内務省が言ってる200数十人というのは少ないということで、朝鮮総督府が聞き込み調査をして出した数字というのが813人、東京横浜合わせて、神奈川は調査中で、横浜については追い切れなかったと思います。

これと別に内田良平という右翼で有名な人がいますけども、内田良平が調べた数字だと、東京府のみで722人といっています。埼玉や千葉、横浜を入れると1000ぐらいはいるというんです。朝鮮人当事者の調査もあるわけです。これは当時、東京に留学していた学生たちが中心に各地を歩いて調べた調査で、これは非常に警察の妨害にあってなかなか出来ないんです。妨害の目のなかをどうにか調べた数字が、当初の途中で発表された数字が二千数百人。最終的に上海の独立新聞という独立運動の機関紙が発表した数字が6661人となっています。実際どこで何人が殺されたというリストを見ると正確とは言えないんです。

今は歴史学の世界では、「数千人とみられる」という以上の表現はできない。本当に正確にどれぐらいの人が殺されたかわからない。その理由はもちろん政府が徹底的にこの真相というものをうやむやにしていく努力をしたからなんです。例えば遺骨を全部処分しろという指示が文章として残ってるんです。朝鮮人の遺体か、日本人の遺骨かわからないように処分しろ。

遺体そのものに朝鮮人と日本人の区別があるはずがないんだから、もともとそんなのは区別しようがないはず。ということは区別しろという文書が出た時点でおそらく警察署には虐殺被害者の遺体があったかもしれないわけです。つまり、これが火事によって死んだ朝鮮人ではなくて、虐殺された朝鮮人だという遺骨を警察が把握していたということの意味しているわけです。それをごちゃ混ぜにしてわからないようにして処分しろというようなことを政府が指示している文書が残っているんです。そういった政府の努力によって曖昧にされていってしまったんです。これが関東大震災の虐殺の全貌です。

### 差別の論理

1923年は1910年の韓国併合から13年後です。韓国併合によって日本人は朝鮮人を非常に見下す、蔑視するようになりました。こちらは上なんだという認識をもつようになった。もう一つあったのが、1919年の3.1独立運動です。しかしこれに対して憲兵や警察が弾圧をもって抑える。そしてこれに反発するデモ隊が日本の警察の建物に火をつけるといった衝突が起きるわけです。この3.1運動というのは当時の日本のメディアはものすごく歪んだ形で伝えていたんです。例えば、デモ隊に対して憲兵が発砲するわけです。

すると当然死傷者が出るわけです。日本のメディアはこれをデモ隊が解散しなかったのでやむを得ず発砲した、その結果、死傷者十何名が出た、というふうにサラッと報じるんです。ところがデモ隊の反撃にあった憲兵が、殺されるようなことがあると、無残な殺され方をした恐ろしいことであると。もはや尋常な心構えて彼らに向かうことはできない、彼らは日本人を憎んでいるんだ、あらゆる悪徳の限りを日本人に尽くしているんだとそういう表現で煽るんです。その結果、日本の本土にいる人たちは、朝鮮人は日本人とみればすべて憎んで殺してくるんだというような認識を持ってしまうわけです。実際には3.1運動のときに少なくとも見積もっても数千の朝鮮人が殺されたのに対して、衝突のなかで死んだ日本人というのは、鎮圧に当たった憲兵や警察で数十人です。

とにかく「不逞鮮人」が暴れている、「不逞鮮人」は何かするかもしれないといったキャンペーン記事をやるようになります。

当時の新聞というのは、今の全国紙みたいな客観報道ではないんです。今でいう週刊誌のような感じに近い。こういった記事をずっと見せられているなかで、「不逞鮮人」という言葉が定着していくんです。そして朝鮮人は恐ろしいというイメージができていく。そこに関東大震災がおきたわけです。そこで流言が流れる。そうするとこれはさもありません。新聞でいつも読んでいた朝鮮人は恐ろしい奴らだから、そういうことをするっていうのは俺は新聞で知っていたよと。この結果、人々が自警団になって朝鮮人を捕まえていくようになります。

## 治安の論理

レベッカ・ソルニットという人が「エリート・パニック」という表現を使っています。災害に際して被災者は自ら協働して救援をしていくものなのに、その力を信じる代わりに、行政がとにかく自分たちの管理が行き届いているのを早く実現しなきゃいけないと発想をする。その結果、空き巣とか略奪とかの噂に過敏に反応して騒ぎ立てる。そういうことを災害時には行政当局はやりがちである、そういうことを「エリート・パニック」という表現で言っているわけですが、警視庁幹部の正力松太郎や内務省警保局が陥ったのがまさにこの「エリートパニック」だったと思うんです。当時の権力者の手記なんかをみますと、地震が起きたときにまさきに恐れたのは、米騒動の再来なんです。

地震が起きる、避難民が公園に集まる、食べ物が少ない、その後暴動を起こすんじゃないか。被災者をどういう風に救援するかということよりも、まず暴動を心配して、皇居の安全を気にかけるわけです。要するに、治安秩序というものをどう回復するかということに関心があって、治安秩序を乱すのは誰かとなったときに、権力者たちからみると、社会主義者だったり、独立運動をする朝鮮人だったりするんじゃないかというようなそういう素地が治安行政の側にある訳です。

そこに流言が流れてくると、庶民以上に行政当局は動揺するわけです。その結果、流言をどんどん拡散してしまう。すごく僕が象徴的だと思ったのは、結局流言を広めるのに、行政が荷担したんじゃないかという批判が当時もあったわけですが、当時世の中が落ち着いた以降にそれを国会で追及されたりもしてるんです。そのときに後藤新平内務大臣が言ったのは、「あれは結果的には流言であったけれども、しかし当時は、そういうこともあるかもしれないと考えてひろめたものであって、悪意でひろめたものではないから、あれは当時はあれで良かった」というような趣旨のことを言っています。あるいは、熊谷事件の埼玉県の行政責任も当時問われたわけですが、神奈川県の内務部長は、あれはあの当時必要だと思ってやったんだと居直っています。

つまり、流言が全部間違いだったことをわかったうえで念のためにやったんだからいいじゃないかと言ってるんです。彼らがいう治安、安全というもののなかに、殺された朝鮮人はもともとカウントされてなかったんだなっていうことが分かります。何もしていない朝鮮人がたくさん殺されたかもしれないけど、よかったじゃないか、結果的に治安が保たれてという発想のことを言っているわけです。彼らは。

これが行政が考える治安の論理。これは決して1923年の日本だけのことではないんです。2005年にまったく同じことがアメリカ、ニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリーナのときに繰り返されていました。

こういったことは今でも起きるといえることです。2005年のアメリカで起きるといえることは、90年前の関東大震災の朝鮮人虐殺というのは特殊な事件ではなかったということなんです。

## 軍事の論理

もう一つの問題として、なんで普通の人々がそんなに簡単に丸腰の人を殺せるのかということがあります。当時の家には武器があったということがあります。もう一つは戦争帰りのお父さん、お兄さんがざらにいたわけです。

1918年から1922年まで日本はシベリア出兵をやっていました。

このシベリア出兵というのは日本が4年間に渡って経験した本格的な対ゲリラ戦でした。コサックを中心に建てた日本の傀儡政権は非常に乱暴で住民たちに対しても反発をどんどん作ってしまうんです。そのうちに木こりや猟師など、住民のなかからゲリラが生まれる。日本軍が移動すると森のなかから撃ってくるわけです。こういうゲリラを根絶するには結局生活拠点を破壊するしかない。

その結果、各地で村が焼かれるんです。まず村の外から大砲を撃ち込んで、それから日本軍がやってきて、農家に火をつけて男達を集めて銃殺してしまう。そういう戦争をやるんです。その結果、ますます住民は日本軍を憎むので、ますますゲリラ戦はひどくなる。そういうゲリラ戦を日本軍はやっていました。突き詰めていうと、日本軍として動員されていた、そこらへんのお父さんやお兄さんたちが、村を焼いたり、全く丸腰の人を殺したり、捕虜を殺したりというような戦争をしたということなんです。

丸腰の住民におきて銃を向けたことがある、あるいは殺した経験があるという人々がいたわけです。

軍事の論理でもう一つあるのは、軍隊そのものによる虐殺なんです。9月2日に戒厳令が敷かれて、東京に軍隊が配備されるわけですけど、当初、軍も朝鮮人暴動というのを実際に起きていると認識するんです。そして各地で朝鮮人を虐殺してまわるんです。「戒厳司令部詳報」という震災総括の文章があるんですけど、これを読むと、朝鮮人と誤解した日本人や中国人も含めて287人の民間人を殺したことが軍自身の記録のなかに残っています。

これは戒厳令下の必要な武力行使であるので、犯罪ではないということになっているので、軍事裁判にすら、かけられていないんですけども、軍自らが相当殺しています。しかもいろんな証言からうかがえるのは、相当手際よい殺し方をしているんです。

針金で後ろ手に縛って、まとめて銃殺するとか。こういう殺し方がなんで東京のと真ん中でできたのか。それを考えるとシベリアや満州でやっていた戦闘の仕方を東京に持ち込んだのだろうとしか思えないんです。

## 三国人発言の恐ろしさ

差別の論理、治安の論理、軍事の論理、この3つから関東大震災の虐殺というのはあれほどの惨事になったのが言えると思うんです。僕にとって、三国人発言から関東大震災の探究が始まったんですけど、ここでようやく僕は三国人発言の危険性を理解しました。

もう一度三国人発言というものを確認しておきますと、不法入国した外国人が凶悪な犯罪を起こしている。実際には外国人の犯罪率が日本人より高いという事実はないので、これは完全に流言なんです。そして、大災害時には大きな騒擾事件を起こすと。これは後に彼は記者会見で必ず起こすとまで言っています。災害時にはマイノリティが悪さをするという「治

安の論理」です。そして、警察力では対応できないので、自衛隊で治安出動してほしいというこれは「軍事の論理」です。要するに行政がやっちゃいけないことを全部石原さんは言っていた訳です。

あれから15年も経っている。石原慎太郎も都知事を辞めた。ですからそんなに心配することはないのかといったら全然そうではないんです。三国人発言のあと、調べれば調べるほど、これは大変なことだと思って、関東大震災と三国人発言の関係ということについて、2000年のときにとにかく友人に自分が発見したこと、見えてきたことを言ってみてたんです。だけど、そのときには友人たちは誰もピンとこなかったんです。

ところが僕の本が出たあとに、ネットなんかを見てますと非常に切迫した反応が多いんです。どういうことなんだろうと思っていたら、こういったツイートがありました。

「これは90年前のことじゃない。今のことだ」って言ってたんです。2000年のときにはいくら説明してもピンとこなかったことが、今は関東大震災の虐殺を引き起こしたその下地というのがまた準備されているという危機感を自然に持たなくていけないというところまで事態が悪化していることを物語っているなど思ったんです。いうまでもなく「在特会」です。朝鮮人を殺せといいながら街をデモしている。街中に朝鮮人を殺せという群衆が現れるのはおそらく1923年以来なんです。

## 日本社会のレイシズム

僕はまた大きな地震が起きたときにまた何千人の人が殺される虐殺が起きるといような、関東大震災の文字通りの再現が起きるとまでは思っていません。けども二つの意味から全く恐ろしいと思っています。ひとつは災害時のマイノリティを敵視する流言というのはこれは絶対に流れるんです。

しかし、今の情勢のなかで、行政当局者たちや政治家たちがそういった非常時に流言を打ち消して、マイノリティの安全を守る側に立ってくれるかっていうと非常に怖い気がします。流言を否定できる力が、日本社会から前よりも相対的に減ってきているのではないかと。

もう一つは、地震や災害とは別に、政治的な意味でこれだけレイシズムが広がってきて、韓国人というのはとか、韓国はこういう国であるという認知が歪んでいると大きな政治的な判断、一歩間違えれば戦争に繋がってしまうといような決定的な政治判断のときに日本政府や日本社会がレイシズムによって判断をあやまるんじゃないか。そういう危惧があります。そういったいろんな意味で関東大震災の出来事は1923年と今とは92年離れていますけども、そこから取り出される本質というのは、まったく今も続いているということを見ておくべきですし、非常にそういう意味ではまずい状況になってきていると言っておきたいと思います。